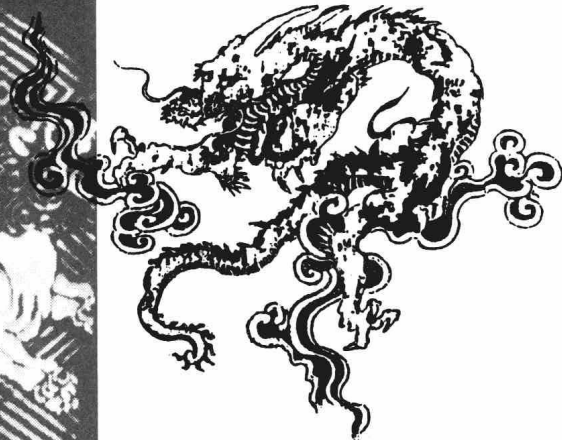


寛政文庫

李白

鑑賞中国の古典

16



三九

監修

小川環樹
本田 済

角川書店

☆本巻執筆者

寛 久美子（かけひくみこ）

一九三二年大阪市生まれ。京都大学大学院修了。中国文学専攻。神戸大学教授。著書に『黄遵憲』（岩波書店）、『上海の暮しのなかで』（筑摩書房）、共著に『中国文学論集』（新潮社）、『漢詩の散歩道』正統（日中出版）、『女性学入門』（サイマル出版）、『日本女性史』（東京大学出版会）、『母性を問う』（人文書院）他。



鑑賞 中国の古典 第16巻

李 白

昭和六十三年八月三十一日 初版発行

著者 寛 久美子

発行者 角川春樹
株式会社 角川書店

（郵）一〇二 東京都千代田区富士見二一三—三

振替 東京三一九五二〇八

電話 東京〇三

（二二二）一五二〇〔編集部〕
（八一七）八五二一〔営業部〕

印刷 大日本印刷株式会社
製本 株式会社宮田製本所

装丁 伊藤鑑治

序

この書は、八世紀・盛唐を代表する詩人として、杜甫と並んで中国内外にもっともよく知られる李白の詩、長短併せて九十二首を選び、訳注と鑑賞を施したものである。そのほかに、巻頭の総説、巻末の「李白の窓」（諸家の関連文章抄録等九篇）、「読書ノート」（二篇）、年譜、参考文献などを加えて『鑑賞・李白』を構成する。選んだ詩の数はそう多くはなく、李白を知るうえで必要かつ充分とは必ずしもいえないが、できるだけ最新の研究成果も取り入れ、おもしろく読んでいただけるように関連する話題をそれぞれに心がけた。漢字の行列を見ただけで拒否反応を起こしてしまうという若い世代に、どこまで、身近で理解可能なものと感じてもらえるか。そうした目的へのささやかな努力でもある。注釈と併せて読んでいただければ幸いである。

総説にも記したように、李白の場合は、選詩の排列をどうするかが、きわめて難しい。約一千首ある作品のうち、ほとんどの制作年代や背景がよくわからないからで、有名な詩であっても、その作られた時期や場所については説が一つや二つにとどまらないものが少なくないのである。これまでの多くの李白詩集や詩選が、詩の形式や標題による分類排列を主流としてきたのはそのためにほかならない。それにもかかわらず、本書では大まかな編年方式を採用することにし、どうしても配分できないものは最後にまとめて不編年としたのだが、なお問題を残すものも少なくはない。李白詩の制作時期を決定するためには、今後まだまだ多くの研究を必要とするであろう。しかしわたしにとって、この書で編年を試みたことは、詩人とその詩を理解するうえでかなり有効であった。李白という詩人の強烈な個性、

鋭い感性、豊かな才能が発した文学に、一二〇〇年あまり後の外国人であるわたしたちが出来るかぎり近づくためには、やはりこうした最小限度の実証的考察は欠かせないとあらためて思う。「李白はこんな表現行為をなぜしたのだろうか」といったことを考え探るのは、難しいけれどもまたなかなか楽しい。もし、この書によって若い人たちがそうした研究課題にも興味を持って下さることがあるならば、わたしとしては望外の喜びである。

ところで、「白髮三千丈」といった有名な詩句を、一度も聞いたことのない高校生は、我が国では恐らく一人もないだろう。けれども、教科書や受験参考書の中で断片的に取り上げられる古典の文学作品を読んでも、そんなに魅力的でおもしろいとはいえないとわたしは思う。教科書は、社会人としての必要な知識を授け、読解の基礎能力をつけさせる、そうした目的で専門家たちが苦勞して編集されたものではあるけれども、料理に例えていうならば、たんに前菜とかオードブルにすぎないからである。古典を本当に深く味わおうとするなら、その作品を系統的集中的にくさん読むのが大切なほうというまでもないことだろう。

そのための一つの手引きとして、この書は有名な唐詩の古典のうちの、《李白とその詩》に関する全体的なガイドブックを目指したものはあるが、それにしても料理人の腕はあまり練達とはいえず、素材のモチ味をうまく引き出せたかどうかについても、はなはだ心もとない。また前菜だけでなく、本膳のかたちになっているかどうかについても不安が残る。多くの方々の忌憚のないご批判を心より願うものである。

なお、中国古典の書き下し文や注釈を書くに当たっては、とくに多くの矛盾点が未解決のまま残されていると思う。いわゆる旧漢字と常用漢字、歴史的仮名遣いと新仮名遣いの間に存在する問題である。国語表記に関する今日の再検討の必要な時期に来ているのではないかと、今回あらためて強く感じたことを付記しておきたい。

終わりに、本書のために「李白の窓」の執筆をこころよくお引き受け下さり、生き生きとしてわかりやすい論文

「ネアカ李白とネクラ杜甫」を早ばやとお寄せいただいた高島俊男氏に、この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思う。筆者の遅筆が災いして、初めの予定よりも大幅に刊行を遅らせてしまい、ご迷惑をかけたことをお許し願いたい。そのほか、「李白の窓」「読書ノート」に論文や図録を借用させていただいた各氏にも厚くお礼を申し上げる。抄録借用の仕方が不適當であるとすれば、すべてわたしの責任である。ご寛恕下さるようお願いしたい。

一九八八年四月

笥 久美子

目次

序

李白

総説

本文鑑賞

故郷・蜀時代の作

戴天山の道士を訪うに 遇わず

白頭の吟 二首（うち一首）

峨眉山月の歌

青雲の志を抱いて応召出仕するまで

一

二

三

四

五

秋 荊門を下る

長干の行 二首（うち一首）

孟浩然に贈る

黃鶴樓にて孟浩然の広陵に之くを送る

天門山を望む

金陵の酒肆にて留別す

春夜 洛城に笛を聞く

魯儒を嘲う

太原の早秋

客中の作

李邕に上る

蜀の道は難し 三首（うち一首）

南陵にて兒童に別れて京に入る

四

五

五

五

五

六

七

七

七

七

七

七

八

宮廷勤め・長安にて

子夜呉歌 四首（春・夏・秋・冬）

八

烏が 夜 啼く

六

清平調詞 三首

九

終南山を下りて斛斯山人の宿に過ぎり、置

酒す

一四

翰林にて書を読み 懐いを言いて 集賢の

諸学士に呈す

一六

瀟陵の行 送別

二二

裴十八図南の嵩山に帰るを送る 二首

二三

行路難 三首（うち二首）

二八

古風 其の五

三五

梁甫の吟

三九

再起を求めて漫遊する

魯郡の東石門にて杜二甫を送る

三八

沙丘城下にて杜甫に寄す

四〇

東魯の二稚子に寄す

一三

丁都護の歌

一七

將進酒

一五〇

北風行

一五七

古風 其の九

一六三

晁卿衡を哭す

一六五

宣州謝朓樓にて校書叔雲に餞別す

一六九

独り敬亭山に坐す

一七三

黃山の胡公に贈りて白鵲を求む 并びに序

一七四

秋浦の歌 十七首

一七六

宣城にて杜鵑の花を見る

一七九

汪倫に贈る

一八七

安祿山の乱後

北上行

一九九

横江詞 六首

二〇四

王判官に贈る。時に余 帰隠して廬山の屏
風置に居す

二二

永王の東巡歌 十一首（うち一首）

二六

古風 其の一

二五

奔亡の道中 五首（うち一首）

三〇

古風 其の四十九

二七〇

早に白帝城を発す

三三

五松山の下への荀媼が家に宿す

三五

李白の窓

其の他（編年不明）

ネアカ李白とネクラ杜甫

高島俊男 二七五

内に贈る

三八

―高校生諸君に―

「古風」の宣言

小川環樹 二九四

夜坐の吟

三九

―「李白」下へ武部利男氏注へへの跋―

関山の月

三九

李太白とドイツ近代詩

富士川英郎 二九六

楊叛児

三九

李白の「静夜思」について

武部利男 三〇三

古朗月行

三八

李白における生地と家柄

松浦友久 三二二

黄葛篇

三九

『伊勢物語』二二三段と

仁平道明 三三三

静かなる夜の思ひ

三九

李白「長干行」

入谷仙介 三三九

金陵の城西樓にて 月下の吟

三九

山中問答

三九

李白の詩の背景

廬山の瀑布を望む 二首

三九

まじめだった李白

寛久美子 三三三

月下の独酌 四首（うち二首）

三七

李白の女性讃歌『子夜呉歌』

山崎純一 三七七

宣城 善釀の紀叟を哭す

三七

に寄せて

読書ノート

牡丹の花

吉川幸次郎 三四

—李白のおはなし—

静夜思

井伏鱒二 三六

李白年譜

三七

参考図

三八

唐興慶宮図

長安城図

長安宮城図

地 図

三六

李白の足跡図

唐・開元・天宝時代の地図（十節度使配置図）

参考文献

三九

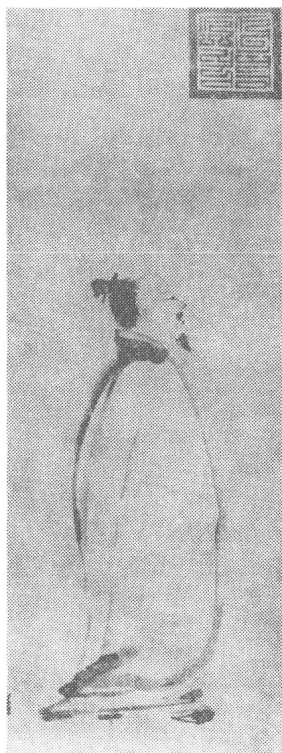
詩句索引

李 白

総 説

本文鑑賞

笥 久美子



李太白吟行図
宋・梁楷筆

総 説

一 李白 人とその時代

はじめに

星の数ほどある中国の詩人のなかで、まっさきにわれわれの目にうつる詩人、いわば一番星は、李白であろう。かれは友人の杜甫とともに、八世紀の中国に現れて、唐詩の黄金時代をきずき、李杜とならび称せられ、中国文学史上、最高の地位に立っている。

李白をこのように紹介したのは、李白を生涯愛してやまなかった武部利男氏である（『李白』上、解説参照。『中国詩人選集』岩波書店）。

この言葉は、日本だけでなく本家の中国における李白の地位をも、適切に言い当てたもののだといえよう。

李白、字は太白。中国音ではリー・ボー、もしくはリー・バイ（どちらも李白。李太白であればリー・タイボ

ー）とよばれる。太白と、字だけでよばれることも多い。中国ではそのほうが親近感が強いからで、本名でよぶのは公式的でよそよしいのである。李白はヨーロッパ諸国でも有名だが、それもやはり字でよぶリー・タイボーの名で親しまれているほうが多いようだ。

中国の後世の人たちにとっての李白は、身近に坐って自分の代わりに楽しい酒や、美しい女や、世の中への不満を歌ってくれる、きつぷのいい親しい仲間と受け取られているところがある。酒屋の看板や扁額に、「太白遺風」「太白酒家」とあるのは、その証拠の一つであろう。ありがたいがよそよそしいような、いわゆる「偉い詩人」ではない。

しかもこの「ロマンティック」な詩人については、話題性の豊かなエピソードが、彼の生きていた唐代に、すでにたくさん作られており、「不遇だった浪漫的詩人の、凡人離れした伝説」を愛する人々によって、今日まで長く語り伝えられてきた。彼の一生を総括批評した言葉に、

南北漫遊（北から南まで好きなように歩き回り）、求仙訪道（仙人や道士を尋ねて道教の奥義を求め）、登山臨水（山に登り水辺に遊び）、

飲酒賦詩（酒を飲み詩を作る）。

というのがあがるが、これも人々の中に共通する李白像を、おおむねうまく言い当てたものといえる。

以下にまず、虚実を取り混ぜたものとはいえ、民間にもよく知られている、「李白像に関する一口イメージ」の幾つかを並べてみることにしよう。

李白は、実は唐王朝（李氏）の遠い親戚筋の人であった。た。

金星（太白星）の精を受けて生まれた。だから名前を太白、字を白という。

少年のころから文武の達人であった上に、困っている人のためには大金を使い果たすのも辞さないほどの「男だて」だった。

天帝から罰せられて、下界に流されてきた仙人（謫仙人）といわれた。

実は西域の異民族出身で、その証拠に大きなみどり色の目をしていた。

宮廷のだれもが分からないような外国語（蕃語）に通じていた。

優れた詩人であるだけでなく、大変な酒飲みで、玄宗皇帝に呼ばれたときもグデングデンに酔っていたのに、たちどころに立派な詩を書き上げた。

酔っ払って、玄宗皇帝の第一の側近宦官で宮廷の陰の実力者であった高力士に、わざと自分の履いている靴を脱がせたり、楊貴妃のいとこで玄宗皇帝に信任された成り上がり大臣の楊国忠に墨をすらせたりして、二人のひそかな憎しみを買った。

月や鳥とも、まるで友達のような付き合いをする風流人で、たびたび山に登っては、道教の仙人と交わり、遊仙と仙薬の世界にあこがれた。

長安を追放されて放浪生活をしていたときに、玄宗皇帝に贈られた宮廷用の立派な錦の着物（錦袍）を着込んで、傍若無人な舟遊びに興じた。

窮屈な宮廷勤めで身分の高い人にうまく仕えることができなかったのは、彼の腰に余計な傲骨が一本あって、身をかがめられなかったからだ。

舟遊びをしていて、水に映った月の影をつかまえようと、川に落ちておぼれ死んだ。

これらのエピソードや伝説は、李白を自由奔放・天衣無縫の人間に仕立て上げただけでなく、彼は権力一般に対する痛快な反骨家なのだと、単純に思わせるようになった。またさらに、その豪快な詩風ともかわって、「盛唐の気象を代表する詩仙」の称号を、彼に獲得させることにもなったのである。

ただ、それらがすべて間違っているとはいえないにしても、従来作り上げられたイメージと実像との間には、当然ながら大きな落差があるように思われる。それには、後述するように李白研究自体の困難さもあるのだが、それにしても、もっともっと実証的な研究を進める必要があることを示している。

幸いなことに、ここ数年来、中国はもちろん日本でも、研究の立ち後れを克服しようとする意欲的な研究が、次々に生まれるようになってきた。喜ばしいことであり、また今後の新しい進展が期待されるところでもある。

一 家族、家庭、そしてその生涯

李白は紀元七〇一年、唐武則天（則天武后）の長安元年に生まれた。まるまる八世紀前半に生きた人である。

年代の下二けたと年齢とが同じ数字なので、はなはだ便利な生年である。

それは、日本でいえば、ちょうど奈良朝時代に当たり、大仏造営が国家的行事として取り組まれつつあったとき（七四三年に仏像造営、七五二年に開眼）である。有名な阿倍仲麻呂などの選ばれた留学生たちが、遣唐使といっしょに長安に派遣され、長期にわたって滞在し、中国文化を学んだ時代でもあった（『晁卿衡を哭す』一六五—一六九ページ参照）。

李白が亡くなったのは七六二（宝応元）年、六十二歳のときである。還暦を過ぎたばかりの年齢だから、今でいえばそれほど長寿ではない。しかし「人生七十古来稀なり」（杜甫の詩句）といわれる当時にあつては、まずまずのほうといえるかもしれない。

晩年の五十五歳になって、李白は、唐朝を揺るがした安祿山の乱（七五五年）に遭遇する。救国の念にかられた彼は、自らの政治的再起をかけて、玄宗の息子である永王璣の水軍に幕僚として加わった。しかし、官軍と信じたのが一転反乱軍とみなされ、思いもかけぬ反逆者の汚名を着せられて、投獄されるはめに陥った。さらにまた、当時は地の果てと思われた夜郎（今の貴州省西境）

へ流刑に処せられる、という憂き目にもあった。それでも、中途で恩赦にあつて帰れたこと、臨終には、彼が親戚と称している当塗の県令李陽冰という人に、自作詩の収集整理を託することもできたのだと思えば、盛唐末のあの動乱期に最期を迎えた詩人としては幸せなほうであつたといえるだろう。中国では歴代、戦乱時であろうと平穩時であろうと、有名な詩人で非業の死を遂げた人は決して少なくないのだから。

李白は伝記的なことがあまり分からない詩人である。出生地、家系、家族、経歴、どれも霧の中にあつて正確なところが分からず、後世の読者たちを困らせている。彼が生きていた当時からすでに様々な伝説に包まれたのは、それとも関係があるだろう。彼は、風のようにどこからともなく現れて、また、風のごとく駆け抜けた人であつた、といつてもよい詩人である。

彼の死因は、酒の飲み過ぎか、または腫瘍のたぐいの脇部分の病氣によるといわれている。だが、「水に映る月を取ろうとして、川に落ちておぼれ死んだ」という伝説も、あながち嘘ではなかったかもしれない、という研究者もいる（後述の安旗）。その理由として、最晩年に

はかなりの狂氣にむしばまれていた可能性があるからだという。確かに、強度のアルコール中毒と、激しい失意と放浪生活の連続が、彼の心身をむしばんだという可能性は否定できない。伝説は、案外真実であつたかもしれないといえる。

その死去に際しては、家族がそばにいたのかどうかよく分からない。ただ、死後には、最初の妻許氏（早くに死去）との間に生まれたと考えられる息子（伯禽）、それに晩年の妻であつた宗氏とが残されたはずである（娘の平陽は早い時期に結婚してのち、早逝したらしい）。遺族のその後についても、彼の死後六十五年たった八一七（元和十二）年に、彼の墓を改修した范伝正の「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑并序」に記される以上のことは分からない。それによれば、李白の息子伯禽の子で、当時すでに農民に嫁した孫娘が二人残っていたのだが、そのときになって捜し出されたということである。唐詩の輝けるチャンピオン、一番星の榮譽は一代限りで絶え、その子孫や末裔も、やがてはいつの間にか草莽に没して行方知れずになつてしまつた。

李白は複数回の結婚をしたらしいが、それが何度だつ